

インド西部マハーラーシュトラ州の民俗芸能 Tamāśā（タマーシャー）

に関する人類学的研究

平成 19 年度入学
派遣先国：インド共和国
飯田 玲子

キーワード：インド，民俗芸能，文化振興

対象とする問題の概要

派遣者の研究対象はインド西部マハーラーシュトラ州の民俗芸能“Tamāśā”（以後タマーシャーと記す）である。この芸能の起源は 16 世紀のムガル朝の軍営に始まるとも 17 世紀に入ってムガル帝国を倒したマラータ王国で始まったともいわれている。

しかし、いつの頃からかタマーシャーは主に下層農民の男性だけが観る芸能という認識が共有されてきた。また、伝統的に歌やダンスのパートを担う lavani（以後ラヴァニと記す）の女性達は、伝統的に売春を副業として行ってきたとされ、タマーシャーの踊り手の女性は売春と関連づけて語られるような側面もある。しかし、2000 年に入ってから州政府が、「マハーラーシュトラ州の伝統芸能」と位置付けようとする動きが活発になってきた。それは州政府の公式コメント（e.g. 新聞，メディア）にも散見される。こうした動きを微細に追うことが博士予備論文の課題となる。

研究目的

本研究の目的は、タマーシャーの全体像の提示にあり、特にタマーシャーの歴史的背景，社会的位置付け，地理的な拡がり重点を置きフィールドワークをおこなった。

タマーシャーに関する先行研究は、社会・政治との関連からの分析（Abrams, *Tamasha: People's Theatre of Maharashtra State, India*, 1974）や音楽学の観点からの研究（Olson, *The Lavani of Maharashtra, a regional genre of Indian popular music*, 1985.）が挙げられる。しかし、これらの論文が出されたあとに、タマーシャーを微細に追った研究がほとんど見られない。また、これらの先行研究では、上記でも挙げた歴史的背景，社会的位置付け，地理的な拡がりに関する記述がほとんどなされていない。本研究では、先行研究から 30 年以上が経過した現在，新たな歴史的背景のなかで、タマーシャーがどのような役割を担い、人々にどのように受け入れられているのかを考えたい。現在のタマーシャーは大きくイメージを変えつつあるが、これらのことを研究することによって、公共文化がサバルタン民衆とエリート市民の間でどのように再構築されているのかを明らかにする。また、タマーシャーを取り扱った先行研究は一層の親族構成や加入方法，コーストや生活世界に関して曖昧な記述にとどまっている。今回のフィールドワークでは、これらの問題点を中心としたインタビューおよび現地語の本を含む資料収集を行った。

フィールドワークから得られた知見について

今回、派遣者はガネーシャ・フェスティバルの時期に合わせてフィールドに赴いた。ガネーシャ・フ

フェスティバルは派遣者の調査対象地であるマハーラーシュトラ州プネー県プネー市において、非常に重要な祭礼である。1800年代後半に入り B.G.Tilak によって民族意識の高揚のためにムスリムたちが行っていたムハッラム祭を模したものとして開始された祭礼であるが、現在はヒンドゥー・ナショナリズムの影響もあり年々隆盛している。

この祭礼の際にタマーシャーが市内のあちこちでパフォーマンスをする様子が見られた。プネー市内で最高位にあるとされるカスバ・ガナパティ寺院の前でパフォーマンスが行われたため（写真1）、女性や子供を含む多く様々な人々が、集まって熱心に観ていた。従来は特定の人々の間でのみ鑑賞されてきた芸能だが、現在は以前よりも多くの人に開かれている芸能になりつつある。しかし、タマーシャーを取り巻く環境は、全て一変したわけではない。派遣者のフィールドでの知人であるブラーマンの家族は、私がタマーシャーを研究することや観に行く事に関して「何故タマーシャーなのだ？」とか「タマーシャーを一人で観に行ってはいけない。」と注意することが多い。



写真1. タマーシャーの劇中
(カスバ・ガナパティ寺院前 特設ステージ)



写真2. タマーシャーの舞台
(アーリャブーシャン劇場)



写真3. タマーシャーの人々の共同炊事場
(アーリャブーシャン劇場)



写真4. 美しいラヴァニ女性の衣装、
このポーズはラヴァニのトレードマーク

ここ数年で新たな観客層を増やしているとはいえ、タマーシャーはまだまだ「低いカーストの人々が観に行く下品な芸能」として認識されている面もある。演者たちに関しても、中には裕福な暮らしをする人々も存在するが、大部分はいまま劇場内で共同生活を行っている（写真3）。

今回の調査で得た資料からは、タマーシャーが2000年以降に「州の伝統芸能」と認知されはじめた要因を一つに絞ることはできない。社会、政治的な状況や、新しい女優達の台頭などによる芸能の確立ということも要因に挙げられる。様々なアクターの介入があって、現在のタマーシャーの位置が確立されてきたし、今後に変化することが考えられる。

今後の展開・反省点

まず、今回の反省点として挙げられるのは、派遣者はマハーラーシュトラ州の公用語であるマラーティー語を理解できないため、主に通訳を介したインタビューを行ったことである。タマーシャーのアーティスト達の言語はマラーティー語（もしくはマラーティー語の方言）である。通訳を介すインタビューはニュアンスを落としたり、思い通りに質問ができなかったりした。これはひとえに派遣者の勉強不足から生じた問題点である。また、現地に行って、彼らの言語で対話できないことは大変に失礼なことであると痛感した。今回の反省点をしっかりと胸に刻み、今後もマラーティー語の修得に励みたいと考えている。

今後の展望としては、こうした文化振興とも呼べる動きを州政府などの上からの視点からだけではなく、いままでの観客やアーティストが行っている実践などの点にも注目して分析を進めたい。今回のフィールド・ワークで得た聞き取りデータや数値データをもとに博士予備論文の執筆を行いたいと考えている。